掟破りのカーネーション

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掟破りのカーネーション

【Ｎコード】
Ｎ５４５１Ｇ

【作者名】
あゆみかん

【あらすじ】
■【文学／恋愛／シリアス／前後作】■カーネーション。ナデシコ科。ダイアンサス属のダイアンサスは、神の花の意。多年草。母の愛、愛を信じる、熱烈な愛、感謝、感動、気品、軽蔑、永遠の幸福。そして、『私の心に哀れみを』。中学生の安藤桃果は、ほのかな恋心を抱えてひとり、……迷子になる。『春・花小説企画』参加作品。

前編

……時々に見る夢がある。
頭が丸まった、鳥かごのような形のガラスケースに入った、一本のカーネーション。
ガラスケースは、一脚の丸いテーブルの上に。
カーネーションは、一輪挿しの細めな花瓶のなかで。花をきれいに咲かせているわ。

それから……そこには小さな人間の男の子が。僅か数センチ単位の小人が出てきて、笑いかけながら。私に指をさしてこう言うの……。

『君にこのカーネーションを贈る。この花は、一生枯れることはない。
君が生きている限りだ。
この花の色が。君を幸せに導いてくれるだろう……』

私が近づこうとすると夢が終わる。
あの花とあの小人の男の子は、何なのだろう。私は何も知らない。

……

安藤桃果は、学業を終え。家に帰る前に商店道にあるスーパーへ

と立ち寄った。
まだ午後４時半頃。刺身や総菜物に値引きシールが貼られるには、早い時間帯だった。しかし中学生である桃果には関係がない。母親におつかいを頼まれただけである。
買ってくるように言われたのは、絹豆腐と白ネギ。
みそ汁の買い忘れかなと、陳列されていたネギの群集から見た目にきれいな一本を手に取った時だった。同じく、ネギを取ろうと手を伸ばした人物が桃果の目にとまる。

男の子だった。
（学生服だ！）
桃果は、物珍しそうにその人物を観察した……黒い、学生服を着て、実に爽やかそうで文芸の一つでも器用にこなせそうなきれいな男子。
何故、スーパーに。しかもネギ。
自分と同じように、おつかいなのだろうかと桃果は思った。

「何？」

突如、男の子の方が桃果に声を掛けてきた。
「い、いえ。すみません……！」
慌てて桃果は目を背け、素早くネギをしっかりと持って立ち去った。一度も振り返ることはなく、顔を赤くした桃果はレジと出入口に近い買い物カート置場まで進む足は止まらず……よほどびっくりしたのだろう、手を胸に当てて、動悸やかましい心臓を落ち着かせようとしていた。
（逃げてきちゃった……変な子と思われたかなぁ、私）
俯き、しばらく頭を上げられなかった。

内気な性格であることは重々承知していた。分かっていてもどうにもならないことも知っていた。
（上業（かみわざ）中学の人かな。ここ近辺だったらきっと）
学生服というだけで考えてみていた。ネギを取った人物は、桃果とそう歳が変わりそうになく。だが、桃果が通う聖マリアント女学院の生徒ではないことは確かだった。どう見ても女子ではない。趣味で学生服を着ているとも考えにくかった。趣味でネギを……もういいだろう。
やっと気が落ち着けて。桃果が、振り向いた直後だった。何かが肩に当たり、はずみで何かが落ちた音がした。
ぐちゃ。
しかも、桃果は得体の知れないものを踏んでしまう。「あああ！」
怒りと興奮をあらわにした声が桃果の脳天を直撃した。
驚き呆然として、桃果は固まってしまう。そして恐る恐る、足をどけてみたらだ。
ぺっちゃんこになった、“それ”は姿を現した。

薄いピンク色の。

「俺のあんまん！」

桃果の踏んづけていたのは、さくら色のホカホカしたあんまんだった。ただし哀しきかな、もう口には運べない。足で踏み潰されて平べったくなってしまい、これは何だろう。あんがはみ出てしまって、何処かの宇宙生物にそっくりだった。ぜひ名前を。
「てめえ……！　どうしてくれんだよ！　ああ！？」
宇宙生物より、目の前の猛獣に桃果は恐怖した。
黒い学生服を着てはいるが、全然爽やかそうではない男の子だった。指をポキポキと鳴らしながら威圧的。体格もよろしく、顔つきが鋭かった。誰にでも遠慮なく喧嘩をふっかけていそうで、怖い凄

みが桃果を襲う。
背筋が凍りついていて、どうにもリアクションがとれなくなってしまっていた。
誰か助けて、と。全身から汗を吹き出して桃果は周囲の大人たちに心すがった。少し離れた所のレジでは店員がレジを一心に打ち込み、並んでいるお客は桃果に背を向けて会計が済むのを待っている。
怒涛のような声が聞こえなかったのだろうか。辺りが賑やかだから？
それとも体良（ていら）く無視された？
桃果には、どうしていいか分からなかった。するとその時だ。

「おい馬場！　何凄んでんだよ。あんまんぐらいもう一個買ってやるっつうの」

荒れ狂う猛獣の肩に手が置かれた。先ほどの爽やかな男の子である。どうやら2人は知り合いか、友人同士であるようだった。
「空島ァ。だってこいつ、謝りもしねえでやんの。あー腹立つ！」
馬場と呼ばれた猛獣の怒りの視線は、隣の彼に移った。彼の名前は。

空島。
空島くん。

桃果の頭のなかの記憶センターへ、確実にインプットされた。
空のなかに浮かぶ島という、勝手な連想まで思い浮かべて。
桃果は脱力しそうだった。まだ何とか堪えて踏みとどまっている。

「ご、ごめんなさい……」

やっと出せた声がそれだった。桃果は泣きそうな顔で、2人を見

つめた。
馬場の方はともかく、空島の方は桃果に納得した素振りを見せて口元柔らかく笑ってみせてくれていた。「うん。今度からは気をつけてよ」
相手を責めすぎず、かといって馬場の非を認めているわけでもない。
馬場と桃果の間をとっていた。全然嫌味を感じさせない空島の態度、気質は、お見事だと言えよう。
「……ったくよう」
尚も愚痴る馬場だった。しかし。
「もっかい（もう一回）コンビニ行って買えばいいだろ、あんまん。そういうとこ、いつまでもシブとくてどうなんだ。もうちょっと我慢を覚えろバカ」
爽やかな男の子のはずの空島は、口が達者なようだった。やはり見事だ。
ただの怖いもの知らずなのだろうか。桃果には2人の関係がよく飲み込めない。
「じゃあね」
桃果がアレコレとぼんやり考えている間に、2人はさっさと立ち去ってしまった。
レジでピー、と。打ちこみエラーの音がする。
店内の狭い通路から段々と、お客がレジへと集まってきていた。もう夕刻にさしかかる。混み合う時間が訪れようとしているのだった。刺身パックなどには上に値引きシールを貼られて。お客の持つ買い物かごの一番上に置かれているのを頻繁に見かけるようになる。
（お礼言えばよかった……）
突っ立っていただけだった。今も。
馬場に言われて謝ることは出来ても。助けてくれた空島にはお礼のひとつも言えなかった。激しい後悔が自分を内面から責め立て、

戻ってくれない時間を恨めしく思った。
（情けないな……）

もし、今度会ったら。
微かに、次の再会を信じて。桃果は、少しだけ前向きに考えることが出来てひとり歩き出していた……

……

夢は、少し色づいていた。
おかげで、テーブル上のガラスケースに閉じ込められていたカーネーションの、色が見て判るようになる。
モノクロームだった桃果の視界には、花のある周辺にだけに色彩が。

カーネーションの、花の鮮やかな濃赤が。
はっきりと、……見えていた。

……

5月の第2日曜日は、毎年聖マリアント女学院では学院祭が行われていた。創立当初から母の日に合わせて設定し開催されており、門から入ると出店が並んでいて外来者を歓迎している学院祭である。
たこ焼き、たい焼き、カルメラ焼き、イカ焼き、何でもお好みに焼け焼きやジュースなどの飲食の出店。休憩にと喫茶店も用意されており、出迎えるはメイドではなく修道女である。
家から持ってきた不要な物を低価格で売りさばくフリーマーケットが催されている。
もっと奥の大きく開けた場所では、演劇や合唱などのステージイベントが進行している。午後からは学長によるカラオケ……いや、

聖歌隊による賛美歌スペシャルが歌われる予定だった。
桃果を含む女学院生たちは、皆それぞれ外来の接客に気忙しい。桃果は、門からすぐの出店で。焼いたクッキーを何個か入れたお菓子の袋とカーネーションの花を、来た人全員に配っていた。
その中でバッタリと。
偶然か、会ってしまった桃果。
門から入ってきてすぐ、目が合ってこちらにと真っ直ぐ向かってきた人物がいた。
2人だったが。

「こんにちは」
「よお」

気さくに挨拶までして、桃果に呼びかけた。
空島と、馬場である。私服だった。普通の白カッターシャツを着て黒いジーンズを履いていた空島とは反対に、馬場は芸術派手柄な黒の半袖で、シルバー装飾（アクセ）を重そうに服の箇所箇所へと着けたストリートスタイルだった。
「ど……ども？」
桃果の焦点が定まらず、浮いたような返事のせいで相手は顔を見合わせてしまった。面白可笑しく、肩を竦めてもいた。
「制服着てたしさ。前会った時」
ヒントを与えたくらいの気持ちで、桃果に空島は助言してくれている。
「そういえば学院祭があるよなって馬場と話してて、寄ってみたんだよ」
すると空島を無視して横から馬場が桃果の手元を覗き込んだ。「それ、くれよ。腹へった」
マットの掛けられた長机の上に、籐かごに入って美味しそうに詰まっているクッキーの袋。机の横には数色のカーネーションが、茎

を揃えて並んでいた。

「あ、あの、これ……どうぞ。持ってってくださいどうぞ」

どうぞ、を繰り返し。桃果は袋と、カーネーションを2人の前に差し出した。受け取った2人はさっそく袋から取り出しクッキーを食べ始め、空島だけが桃果に話しかけていた。

「ああそうだね。母の日だった。だから配ってんだ、花。ほとんどピンクと赤色だね。定番かな」

どきどきと高鳴る心臓の音に耐えながら、桃果は答えた。「黄色だと、相手に渡すのに失礼になるかなと思いまして……」

両手を下で合わせてもじもじしながら、必死だった。「どういうこと？」

桃果の心中知らず、明るく空島は続けて聞いた。桃果は汗ばんでくる体と焦りにさらに耐えながら、一生懸命に口を動かしていた。

「カーネーションの花の色によっては、意味が違ってくるんです。黄色には、軽蔑、侮蔑、美、嫉妬。とても相手には贈れませんよね……。ちなみに、紫には誇りや気品、開発されて青もあるんですが永遠の幸福なんて言われています。ピンクだと感謝や感動、赤だと母の愛や熱烈な愛……無難ですね」

俯いて何とか説明し終えた桃果に、感心して空島は頷いた。

「へえー。花言葉ってやつだね。なるほど、うっかり黄色なんてあげられないじゃん。ここにはないけどさ……って、ああ、知ってて外したのか。さすが女の子だね。気配りきいて」

桃果の体が強張ってしまった。空島に褒められて、汗がますます吹いてくる。

焦りが焦りを呼んでくるようでいて、桃果はこの先の会話をどうしようアンドどうしようと、心でもがいていると。話に馬場が割っ

て入ってきた。
クッキーは完食済みだった。
「『母の日にカーネーションを贈る習慣は、１９０７年にクリスチャンの女性が母の命日に教会で配ったのが始まり』なんだと。紙に書いてあるぜ。空島、花やるからクッキーよこせ」
袋のなかに一緒になって入っていた紙に書かれていたことを読み上げて、馬場は空島にクッキーをせがんだ。「おいおい」
空島は呆れたように馬場に苦笑いをする。桃果は、あ、と声を上げた。
そしてクッキーの袋をひとつ、つまみ上げる。
「馬場くん。よかったら……もうひとつあげます」
桃果を意外そうな顔で馬場は見た。「まじで？　いいわけ？」受け取った馬場はまだ信じられない様子だった。
「だって……あんまん、潰しちゃったから……」
馬場はあまり桃果の言葉を聞かず、素直に喜んで袋を素早く開封した。「じゃあな～」
そしてスタコラサッサと華麗に去ろうとした。「おい！　待たんかい！」
空島は慌てて、追いかけようと桃果に背を向ける。だが、再び桃果の方を振り向いて「じゃあね、またどっかで」と言い残し、駆けていった。
去る時も、少しだけ笑顔だった。
いつも人には、笑いかけているのだろうか。桃果は思った。
そして。

（何か、嬉し……）

汗がひいて、乾いて寒くなるかと思われたがそうはならなかった。ずっと熱が桃果の体から無くなってはくれない。何故なのか。
夢が教えてくれるだろう。

その日の晩に見た夢のなかでは、カーネーションがピンク色に可愛らしく咲いている。
たった一本だけのカーネーション。咲く。
小人は、笑う。小首を傾げて。
桃果に語りかける。音はなく。
――小人の顔は、……空島に似ている気がした。

……

数日経ったある日。
聖マリアント女学院から家に帰る途中、電車に乗ろうと駅に辿り着いた桃果は、ふと気がつく。
改札の前で、黒い学生服姿の幾人かの生徒が通りすぎ、桃果の視界に入ったのだ。
全くの知らない他人男子の集団だったが、学生服というだけで頭のなかに思い浮かばれる顔がある。
思い出すたび、決まってため息をついてしまうのには……桃果はもう飽きていた。
（何で……）
運賃表を上に見上げながら、泣きたくなるような気持ちを噛み締めた。
桃果がこれから乗ろうとする電車、路線の降車駅。そのまま降りずにルートを辿っていくと、その進行方向の先には上業中学の最寄りの駅がある。
上業中学。在学しているとはっきり知ったわけではないが、可能性があった。

空島がいるかもしれない。
始め小さかった思いは強く。

桃果に、決断を持ちかけていた。
行こう。
桃果の指は、ひとりでに上業中学、最寄駅の『野ばら闇雲駅』へ向かう分の切符購入ボタンを押していたのだった。

電車は、緩やかに左右に揺れながらお客を次の駅へと運んでいく。
まだ夕日を見るには早い時間で、乗車している人もまばらだった。
桃果は、４人掛けの席の窓側に座って窓の外の景色を眺め、薄く見える窓に映った自分の顔をも同時に見ていた。
自分の隣にも前にも人は座っており、席は向かい合わせで手荷物である自分の学生鞄は膝の上に行儀よく置いていた。
時々、目を伏せて外気から遠ざかろうと眠ったふりをしながら。
空島のことを……思っていた。

『ああそうだね。母の日だった』

空島とした、言葉ひとつひとつのやり取りがとても貴重なものに思えていた。
どうして忘れられないのか。
どうして、停車駅を変えたのか。
どうして……また会いたい、会えるかもと思えるのか。
どうしてが続く。

桃果の家の玄関の脇には。
残った分を生徒で分けあって持ち帰ってきた、母の日のカーネーションが色とりどりに咲いている。

赤、濃赤、白、ピンク、紫。割合では、やはり赤とピンクが多い。母の愛、感謝、温かい心。

桃果の母は花を始め見た時に、特に何も言うことはなかった。

花瓶は何処にあったかしらと、探しにトタトタと音を出し。スリッパ履きの足が廊下を小走るだけだったという。

空島の何気ないひと言ふた言のおかげで、桃果は母親のことを考えた。

カーネーションをあげたのは、学院祭で残ったのをもらってきただけで。自発的にあげようとする行為自体は、自分の成長と共に何処かに置いてきたことを。

確か幼稚園ぐらいの歳の時には、喜んで似顔絵を描いたり、お手伝いをしなさいと先生に言われてしたいと申し出るなど積極的だったはず。

いつからこうなってしまったのだろうか。母親とは疎遠になっていくようで。

今朝は挨拶をしたっけ。……覚えてはいない。

（……ん？）

桃果は急だったが、現実に戻ってきた。

まぶたを開けて、目や視線は動かさずに。しばらく様子をみていた。

脇腹のあたりで、モゾモゾと動くものの感触が伝わってきたのだった。

（何？　これ……）

桃果の隣には、黒のジャンパーを着た大柄なおじさんが座っている。確か席に座る直前に見た桃果の記憶によれば、変哲もなく真面目そうな風貌をした３０か４０代くらいのおじさんだったと思い出す。座る桃果とおじさんの体と体は、おじさんの大きな体格のせいで至近だった。

腕を組んで上着の袖下に隠しているのか、手が直接には見えない。だが、見えない何かが『動いて』いるのは確実で、桃果の脇腹へと伝わってくるのだった。

桃果は、やっとそれが痴漢だと気がつく。

見えない何か――汚き『手』は、調子づいて楽しんでいるのか、やめることは毛頭なさそうだった。まさぐっている。

脇腹が好きなのか、もしや胸元にまで近づこうとしてくるのでは。桃果は痴漢と思い始めた途端に恐怖に襲われ、強張って体は動けなくなってしまっていた。

（ど、どうしよう……あと2駅で『野ばら闇雲駅』に着くんだけど。2駅ぐらい、が、我慢したらいいかな。降りようと見せかけて、逃げたらそれで……）

金縛りになって動かせない理由を、無理やりに納得させていく。辛抱、我慢、耐える……相手の為すがままに。桃果は、せめて震えを悟られないようにと、……頑張った。

時が過ぎるのを待て。待てばいい。待ってろ。

身に言いつける言葉も、命令調で乱暴になっていく。

電車は、ガタンゴトンと音を大きくカーブにさしかかり。晴れた陽気な空のなか線路の上を滑り駆け抜けて。規則正しいスピードは、桃果にはとても遅く感じていた。

「おいアンタ」

聞き覚えのある声が、座る桃果の頭上から降ってきた。

男の子の少しかすれた声で、偉そうな物言い。「え？」

桃果は塞ぎ込んでいた頭をヒョイと上げて、後ろを見た。

背もたれの向こうに、学生服を着た人物が立っている。

「ば……」

桃果の気が逸れてしまったが、痴漢の手は声と同時に引っ込んでいた。

「ちょっとこっち来い」
馬場だった。
うっかり名前を呼ばなくてよかったと桃果は後で思う。
馬場は、桃果を見て言っていた。睨んでいるようにも見えるほど、鋭く目つきは桃果を捉えている。何が彼にそんな怖い顔をさせるのか――桃果は、呼ばれて座席から離れていった。
痴漢と思わしきおじさんの前を通り、出ている足を踏みそうになりながら。
桃果は……魔の場から脱出し馬場の元へと行った。しかしすぐ馬場に手を引かれる。「どこ行くの！」
慌てて桃果が叫んだが。「いいから来い！」
馬場に手を引っ張られて車内を歩き、２人は奥の車両へと移っていった。
馬場は移った途端、歩きを止め桃果に振り向いた。まだ怖い顔をしている。「アンタさあ」
眉間のシワが減ることはなかった。
「窓に映ったあんたの顔。あんな嫌そーな顔してて。何か変だなーと思って後ろから観察してたらよ」
ズバリと言い当てた。
「痴漢にあってただろ。……すぐに逃げろよ。声出すとか。方法あるだろ」
説教は止まらなかった。
「我慢してねえで、もっと勇気出しな。女とはいえ情けねえ奴」
桃果に言葉はなかった。
ただ自分に情けなく、馬場の言葉を聞いていた。全て馬場の言う通りだと認め、言い返したりする余地も度胸もなかった。目に薄っすらと涙を浮かべて。「ごめんなさい……」
謝られても、馬場は桃果から顔を背けて何も言わなかった。曇る表情は変わってはおらず。黙ったのはせめてもの馬場の優しさだろうか。だが。

「とにかく。アンタ……お前、すげえ鬱陶しい。うじうじうじうじ。見るからに。ムカつくついでに教えといてやろうか」
優しさとは前言撤回で、また馬場の悪口攻撃は続いた。桃果は終始俯いていたので馬場を見てはいないが、顔を上げることは忘れて馬場の言葉に注意がいった。「？」
「さっき空島とは遊びの帰りで別れてきたんだけどよ」
馬場は車内から、窓の外の流れゆく景色を見ている。電車は、あと数分でホームへと入るだろうとアナウンスが知らせて予想できた。
桃果は馬場がそう言ったので、ああそれで学校に向かう方向の電車に、と。納得した。桃果はぼんやりとして馬場の吐かれる次の台詞（せりふ）を待っている。
「空島には、母親なんていねえんだよ」

……

桃果は、衝撃の事実を知った。馬場は言う。
母の日であり、学院祭だった日。桃果からカーネーションを受け取った2人が帰りに向かった先とは。

――墓地。

空島が急な思いつきで馬場に行ってほしいと申し出た。始め行く先は地名しか聞いていなかった何も知らない馬場は弾みながら、「いいけど？」と軽く受けて了承していた。
空島が墓地へと迷わず進んでいくのに、段々と馬場は元気を失くしていった。
馬場も衝撃だったのだ。知らない空島がいる。

行き着いた墓前に立つ、空島を取り囲む触れてはならない領域、空間を馬場は。

「見てらんねえよ……」

それは、桃果に言った、空島には言わなかった言葉だった。

空島の母は、空島が幼い時に病気で亡くなっている。墓に、桃果からもらった花を添えて。

「白だったらよかったけどね」

空島はそう呟いていたという。

白いカーネーションは、故人の母にあげるもの。学院祭で空島たちと話をしていた時、桃果は花の白については触れなかった。手元にも数少なくしかなく、話すと辛気くさくなるかなと桃果は考え、敢えて言わなかったのだ。

しかしすでに空島は白の意味を知っていたらしい。説明したことも、始めから得ていたことなのではと――桃果は再びショックを受けた。

空島に会わせる顔がない。

桃果は馬場が降りた停車駅で彼を見送った後、目的地へは行かず――乗り替えて帰路へと戻っていった。

……

夢の花は教えてくれる。無知な桃果に。

今日の色は黄色だね。軽蔑、侮蔑、愛情の揺らぎだ。いつもの小人が、桃果を指さす。空島のような顔をして。面白そうに。

知ってた？　黄色には、友情っていう意味もあるんだってさ。どうしてかな。

赤にも白にもなれないあいつは嫉妬してるんだろう。……あいつって誰？

あいつはあいつさ。

誰だろうね？　……当ててごらん。

後編

おかしな言い方だが、葉桜が満開である。
花弁は全て落下し、草木の息吹く音が聞こえてくる新緑の葉の色は、桃果には何色に見えたのだろうか。艶めく鮮やかな萌黄だろうか、それともネギの芽に似た萌葱の色だろうか。
古来の詠み人の如く、歌に愉しむ発芽（発想）など。残念ながら桃果は持ち合わせてはおらず。外に関心が行くどころか、日を重ねていくうちに頭痛がするほど桃果は内に閉じこもり、ひとり思い悩んでいたという。

「桃果、ご飯よ。降りてきなさい」

階段の下から桃果の母の声がした。1階から2階の桃果の部屋まで、通りのよい慎ましい声だった。
桃果はゆっくりと勉強机から伏せていた顔を起こし、立ち上がった。気が緩むとふらつく足に少しだけ喝を入れながら、階段を降りていった。これから夕ご飯である。
しかしその前に、桃果は玄関の方を向いた……。
（カーネーション……咲いてる……ね）
凛というよりは、可憐として咲いている赤、濃赤、白、ピンク、紫のカーネーションの花。水は毎日と替えられているらしく、花瓶のなかで咲き揃っていた。
空島を、知らぬこととはいえ傷つけてしまったに違いない。
思い込んで放さない考えは、桃果の健康にまで害が及んでいた。
（私……）
ひとつだけ桃果に分かったことがあった。

桃果は、空島のことが好きなのだ。

夢のなかのカーネーションは濃赤に輝き続ける。意味を桃果は知っていた。

私の心に哀れみを。悲しみを。そして。

欲望……と。

……

聖マリアント女学院では。学院祭を終えてからしばらくは、月末に控えた中間考査のために生徒たちは出題範囲やノートの見せ合いなどで忙しく、問題の問いに答える日々だった。テストが終わると授業参観、保護者懇談会が待っている。

将来の夢や進路のことなど爪の先ほども考えてはいない桃果だったが。迫るテストの日のことは考えていたようだ。小さな単語帳を持って、電車に乗った帰り道。桃果は単語帳に書かれた英語をブツブツと頭のなかで読み上げ、暗記していた。ｓｐｒｉｎｇ、ｏｎｉｏｎ、ｌｅｅｋ……。

国語も数学も社会も理科も英語も。抜きん出て得意とする教科はこれといってなかった。全部が平均的で、刺激も与えられない小顔をしている桃果。時々家でクッキーやケーキを焼いたり、流行りの少女漫画や小説を読むくらいの娯楽を楽しむ程度だった。

こんな、退屈な毎日を。

時の流れにのって、生きている。花は、花を咲かせているというのに。

桃果は単語帳をめくった瞬間、胸の動悸の高鳴りを聞いた。
ｌｉｋｅ。好む。
愛する、という意味のｌｏｖｅは強い感情を表し、ｌｉｋｅは気に入る、といった具合であまり感情的ではない。それは桃果も意味は判ってはいるのだが、『好』という字に敏感に反応している。してしまった。
途端に悲しくなるというおまけ付きだった。
（行けないけど……会いたいよ空島くん……）
空島への想いは募る。黙っているだけで足の動かない桃果に、同じ電車に乗り合わせている客は誰も何もしてくれるわけではなかった。
電車は、何事もなく桃果を目的地へと運ぶだけである。

桃果が家に着くと、カーネーションが1本だけ玄関に落ちていた。
「？」
すぐ横の棚の上に置いていた花瓶のなかの1本。落ちているのは白いカーネーションで、花を見たと同時に桃果は背中に悪寒が走った。それが何故なのかは後にも疑い知れずにいる。
花の落ちていた真横に、黒い大きな紳士靴が揃えて行儀よく置いてあった。
桃果の、父の靴だった。
「お父さん……？」
桃果は不思議に思った。会社から真っ直ぐ帰ってくれば、こんなにも早く帰宅できるものなのかと考えた。まだ夕刻である。時計が手元になかったので正確には時刻が不明だが、乗ってきた電車到着時刻と家までの徒歩にかかる時間を足して計算してみても。夕方5時半。父の帰宅は早い。
玄関から見える奥の部屋の照明が、普段より暗かった。

桃果は寒気を肌に感じながらも、奥へと急がずに平静に装い進む……。「ただいま……」

迎えてくれるのは、テーブルについていた父ひとり。

肘をついて、考えごとをしていたが桃果の方を向いた。「おかえり」

蛍光灯の下に上げた桃果の父の顔は、微かに頼りなく笑っていた。上着は脱いで椅子の背もたれにかけて、着替えず。桃果の帰りを待っていたのだろうか。桃果を見つけて喜んでいるように見えた。

「どうしたの……」

聞かずにはいられず、桃果は聞いた。

「ん……」

父は目を逸らす。そして額の汗を拭うような仕草で、頭を抱えた。どこを見ているのだろうと桃果はテーブルの上に注目した。紙が１枚、広げてある。

紙に印刷された字は、何の用意もない桃果の目にストレートに飛び込んでくる。離婚届――り、こ、ん、届と。

それが全てを物語っているかのように。

「まさか……」

……桃果の呟きは、事の重大さを足踏みで呼んできたようだった。父も、呟く。

「お母さんのことは忘れなさい」

隠れて見えない父の顔を、桃果は恐ろしくて見ることができなかった。

その日、桃果が床につくまでに。父は桃果に事のあらましを説明してくれていた。

桃果の母は、他に好きな人ができた。だから父とは別れ、家を出

て行った。離婚届に判を押し、提出だけで済むようにと。手はずを整え荷物をまとめて、桃果に会う前にと出て行った。
出て行った。
ベッドのなかで桃果は。
鼻の奥が詰まり、息ができないと……泣き明かした。
頭痛もひどくなり、桃果を苦しめる。

……

夢のなかのカーネーションは、色を失った。
指し示さない。
代わりに、桃果の声がした。

『お母さんは頑張っていたのに。私やお父さんの面倒もちゃんとみて家事をこなして。
お母さんが大好きだった。小さい頃はいつもくっついて歩いていたよ。幸せだった。
なのに。どうして？
裏切られたみたいだ。
どこにいるの、……お母さん』

一睡もできずに朝を迎えた桃果に夢を見ることはできはしない。
では、今までに見た夢は？

小人は笑っていた。色のないカーネーションには触れてはいない。
丸いテーブルの上のガラスケースのなかで枯れずに咲いているのだ。
命はあるのかと問いかけたくもなろう、茎の芯は、しっかりとしている。
小人は笑っていた。色のないカーネーションには触れてはいない。

それは。
触れてしまうと……何かが起こる。
「刺激が欲しいの？　退屈は嫌？」
小人は笑う。
桃果は……何も知らない。
ここが、自分だけの小っぽけな世界だということを。

……

朝起きた桃果は、重い頭で学校へ行く準備をした。
制服に着替え、髪を整え、朝食は抜いて、歯を磨き。鞄を持って、玄関へ。
途中、桃果の父がキッチンから呼びかけたが桃果には聞こえなかったらしく、応答なしで玄関に座って靴を履いていた。履き終えて立ち上がるとだった。
1本のカーネーションを花瓶から抜き取った。
（お母さんどこ……）
赤いカーネーション。枯れずに咲く……だが、色は日が経ってだいぶ褪せていた。
（どこ……）
頭と体が離れている。体は学校へ行く支度を。いつものように、習慣で。
頭のなかでは違うことを。
お母さん。
太陽の下、桃果は駅へと向かって行った。右手に鞄を、左手に花

を持っている。
学校へ向かっていると思わせて、片手には花。もし見て桃果に関心があったなら、異変を察知できたかもしれない。しかし誰も気がつかないし振り向かない。桃果の横を通りすぎる他人は、やはり通りすぎていく。何も知らずに。
まるで迷子。
桃果は駅のホームに着き、定期券を改札で駅員に見せた後……学校とは逆方向の電車に乗り込んでいった。向かったのは、……『野ばら闇雲駅』。
桃果のなかに棲む欲望……いや、願いは、自然と足を向かわせる。ラッシュ時であり人は多いが、都会ほど深刻ではない人混みに紛れ、桃果は初めて『野ばら闇雲駅』のホームに降り立った。「あっと、すみません」
桃果に体をすれ違いざまにぶつけた他人は、軽く謝って先を急いで行く。学生、サラリーマン、旅行鞄を引っさげた団体。駅員、売店のおばちゃん。清掃員。
桃果のいつも利用している駅とは、そう景色は変わらない。初めて来たのに、新鮮さは伝わってはこなかった。
「あれ。アンタ……」

桃果が乗ってきた電車が走り出し行ってしまった後。降りたホームの向かいから、桃果に話しかけてきた『他人』がいた。
「何でここにいんの」
奇妙なものでも見ているように、桃果を見た黒の学生服を着た男の子。
「……くん」
小声が、発せられずに消えてしまった。桃果の前には。
馬場がいる。
肩から鞄を掛けて、ペットボトルのお茶を持っていた。
「どうした……」

別の声が馬場の背後から聞こえた。桃果も馬場も、声の主の方に視線が向いた。
空島だった。
「空島くん……」
馬場と空島、2人とも驚いた顔をして桃果を見ている。桃果はすぐには答えられず、泉のように沸き上がってきた熱いものを押さえつけようとした。それが目から飛び出してきそうなのを堪えながら。
空島に会えたことが嬉しくて。ここがホームだということを忘れて走り出したい衝動もあった。ところが。
「学校サボリ？　まさか」
馬場の冗談か指摘は、桃果の高揚を沈下させた。「……」桃果に返す言葉は見つからない。桃果本人のなかでは、紆余曲折に混乱しているようだ。出口が見つからない、追い込まれていく。何に対しても敏感になっている桃果は、あんなに会いたかった空島をも敵ではないかと疑い始めた。内にいる桃果は叫ぶ。

（うるさい……）

桃果にしか聞こえていない声。桃果は、馬場たちの前で屈んだ。頭を抱えている。鞄は地面に落とし、花だけを持って。おかげで、茎の先でくたびれかけていたカーネーションの花の赤が、よく映えた。馬場と空島、2人の目に止まり、お互いに顔を見合わせている。
「何なんだよ？　泣いてんのか？」
馬場の荒げた声が先にした。桃果はしばらく黙っていた。しばらくは。空島の方は、まず目線を合わすために桃果と同じく屈み込み、肩に手を優しく置いてあげていた。それから。「立てる？」
桃果を心配する空島の姿がそこにあった。桃果は、そんな空島の態度に疑心を持つなんてと我に返る……馬場の小憎い顔が視界に入って、さらに馬場の前に言った言葉が頭のなかで繰り返された。桃果が痴漢にあった時の。

『我慢してねえで、もっと勇気出しな』

胸に響く。桃果の背中が言葉に押された。

「空島くん！」

名前を言い切ることができた。最初の一歩の成功といった所だろうか。桃果には小さな一歩でも、大きな飛躍として捉えに値しよう。空島は「何？」と桃果と花を見た。

前に突き出される花を、どう受けたらいいのか戸惑っていた。

「好きです……」

……電車が通過した。

止まらない快速電車は、止まらない。ホームを無視してレールの上を、駆け抜けた。

屈む桃果と空島の2人の間で花は動かされ、……揺れる。揺れて……。

意を決して告白した桃果の小声は、かき消されてしまったのかと思われた。口唇を噛み締める桃果に、空島は影を落とした目で相手を見据える。

「悪いけど……」

返事が、聞こえていたよと表していた。桃果の肩が瞬間、ビクリと微かに反応してしまうが、空島は構わず言った。

「少し、考えさせてくれる？」

花は返された。

桃果から溢れてくる涙をすくうものは残念ながら無く。

「ごめんなさい……！　私、私……。空島くんに酷いことをした。何も知らずに。花なんかあげて……ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！」

桃果はまた混乱していた。連呼し、幾つもの悲しみが渦巻き交錯

していた。

……

馬場のように自分の思うことを好き勝手に言えたなら。桃果にはどんなによかったのだろうか。

桃果にはできなかった。足はあっても意志が出ず。勇気がない。

『囚われ』の姫のよう。

自らで決まり、ルールを作り、従わなければ自分で自分の首を絞めて。所詮お前には無理だよと自分は自分を諦めさせる。これはまさしく。これは。

これは、自分との戦い。

これは、自分の殻を破る戦い。

小人は鼻笑ってなどいない。桃果に教えてくれているだけだった。指をさしながら。逃げないで、花の色から。ほらご覧。色が黄色じゃなくなった。ほらご覧よきれいに……

咲いているじゃないか、白のカーネーション。『私の愛情は生きている』。

……

とうに学校の始業時刻は過ぎていた。

空島たちや桃果はすでに遅刻を覚悟し、野ばら闇雲駅のホーム、ベンチに座って静かに時が経つのを待っている。時を……即ち、桃果の精神が安定するまで。

「落ち着いた？」

頃合いを見計らって、空島は声を掛けた。桃果と並んでベンチに腰掛け、その後ろに立って馬場は様子を見守っている。時々、はあ～あ、と馬場のため息が漏れていた。

「ん……うん。だいぶ……」
まだぼうっと地面の何処か一点を見ている状態で、桃果は空返事で返していた。父と母の離婚のこと、空島のこと、空島にあげたカーネーションが激しく空島を傷つけたのではないかと気に病んでいたこと。全て洗いざらい胸の内を拙い言葉で曝け出して桃果は、だいぶ病状が快方に向かった患者になった。
学生服のポケットに手を片方ずつ入れながら、ベンチの背もたれに身を預けて。楽に姿勢を崩して……会話が立ち消える前にと空島は、温まる詩を朗読するぐらいに穏やかに話をし出した……。

「お母さんが大好きだったんだね」

まずは笑いかける。だが桃果を見てはいなかった。
「僕も好きだよずっと。あんまり、男がこう言うのも……どうなんだかと思うけどさ。嫌いって言うと嘘だしね。まあ、別に子どもが親を好きといっても、いいかと。とっくにその線は越えたな」
照れは一切なく、隠すものがなく堂々と素直そうにしている。桃果には、空島がとても魅力的に見えた。男の子なのにお母さんみたいで変ね、と桃果は思った。桃果の母のことではなく、全てを包み込み許す神のほうの母。
空島は続ける。
桃果に母みたいと思われて。だが。
「どんなんでも……親にはそばにいてほしいよな……」

空島を見た。
桃果は改めて気がついた。自分のことで頭のなかがいっぱいで、忘れていた。
空島には、母はいないのだ。どんなに頑張っても、もう会えない。どんなに会いたくても、祈っても、……もう会えはしない。
桃果よりも辛いのかもしれない。思い出したくないことを思わせ

言わせて、母みたいだなんて自分はああ何てぶしつけなんだろうと、桃果は自分の呑気さバカさ加減を呪った。
「ごめんなさい……」
ぐす、と桃果は鼻をすする。聞こえた空島は振り向き、弱った顔をした。
「何も悪いことしてないじゃないか。気を使いすぎなんだよ……そんなんじゃすぐに疲れてしまう。やめなよな、考えてばっかり」
さっきまで母だと思わせていたが、今度は父のように叱りつけた空島。桃果はどっちでも、空島を取り巻く見えないものの存在の大きさには敵わないと負けている。空島だって子どもであるのに。桃果との差を明らかに感じていた。
「誰かがみててやらないとな……とりあえず、携帯のメアドと、名前教えてよ」
前向きなことを言い出した背後で、急に騒ぎ出した者がいた。
「うぜえええ！」
馬場は。腕をさすりながら、勢いよく桃果たちの間へ飛び込んで割って入っていった。
「おめえら……！　見てて全身がかゆいんだよおおおお！」
ホーム中にその大声は支(つか)えなく響き、近くの他人たちは目を見開きながらそちらに注目する。
売店のおばちゃんの手から、陳列しようとした豪華せんべいが滑り落ちてしまった。
地域限定、さくら色。だがもう売れ筋の線からは遠のき、賞味期限は迫っている。
微妙で曖昧な三角関係が産声をあげてここに誕生した。日本各地で、遅すぎ咲き桜が華麗散々と狂い咲く――。

……

私は久しぶりに夢を見た。
いつもの小人の男の子が出てきてね、カーネーションの花を見せてくれて。花の色はね、赤色だったの。
あれ、ピンクじゃないんだ？　って……思った。ピンク――ええと花言葉は、熱愛、感動、感謝、上品、温かい心、あらゆる試練に耐えた誠実……でもまあいいかな、赤でも。赤は。

母の愛。愛を信じる。

私は前向きになれた。貴方のおかげでね。こんな弱虫ですが、これからよろしくお願いします。小人さん。
あれ？　……誰よ、花を盗もうと寄ってくるのは。もしかして。
やっぱり。馬場くんね！　そうはさせないわ。
だって、それはいつかお母さんに会った時に渡すつもりなんだから。そのガラスのケースにしまっておいてよ馬場くん。邪魔しないで！
私が生きている限り、なくならないんだから……。
許せるかな。
許したい、お母さん。私の唯一の、お母さん。
この花の色が、ずっと愛の色でありますように。あり続けますように……

……

あい変わらず桃果は、自分の世界のなかでゆったりと温(ぬる)く、心地よい温度の水に浸(ひた)るだろう――それが自己を満たし、桃果を幸せへと導く。
玄関に飾られたカーネーションを数えてみると。桃果が持ち出した1本を除いても、最初の数より数本少なかったという。何故か？

持ち出したのが父ではないとしたら、誰なのか。

それは桃果が大人へと成長した時に、知ることになるだろう。

《ＥＮＤ》

後編（後書き）

ご読了、ありがとうございました。
後書きはブログ（ＰＣ用：ｈｔｔｐ：／／ａｙｕｍａｎｊｙｕｕ．ｂｌｏｇ１１６．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－１４５．ｈｔｍｌ）にて。
出典先：本「花の名前」（著者：浜田豊）ほかネットで調べまわって色々と参考にさせて頂きました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5451g/

掟破りのカーネーション

2010年10月8日15時48分発行